

ある少年の逆行

—— 中村星湖の『少年行』試論

朱田云

✉ zhutianyun@fudan.edu.cn

Shonenko, Nakamura Seiko's magnum opus, is widely considered to be one of the most significant works of Japanese Naturalism. It is usually read as a coming-of-age story of two boys, Takeshi and Makio. One was born in the country and the other in the city. They met each other at Takeshi's primary school in the countryside and became friends, but Makio went to secondary school one year earlier than Takeshi. Later, they met again at Makio's secondary school, but were never as close as before. At the end of the novel, Makio who used to like painting, went mad and then died prematurely. By contrast, Takeshi successfully transformed himself from a country boy to a leader at the city's secondary school. Two most salient features of the novel are the style of recalling and the landscape description that arouse many scholars' interests as well as most of their criticism towards the story. The focus of this study is on the different ways that Makio was called. In the text, the way that Makio was called changes a lot. Sometimes it is *Miyagawa* (his given name), sometimes it is *Makio-san*, and sometimes it is *Makio-kun*. Through a detailed text analysis, a different growth pattern that does not meet the requirements of Meiji era, and the hidden meanings of the text are supposed to be found. This approach might contribute a different way to read this novel as well as to find a real child in modern Japanese novels.

Keywords The Way to Be Called(呼称), Social Success(立身出世), Meiji Era(明治), The Way of Growth(成長の道), Retro Gradation(逆行)

1 はじめに

「少年行」は、1907年(明治40)5月に「早稲田文学」の懸賞に一等当選、第18号懸賞物語披露の巻に掲載され、1915年(大正4)『少年行』(植竹書院)として刊行された、中村星湖(1884-1974)の出世作と呼ばれている作品である。

「少年行」は少年奈良原武の視点から、転校生宮川牧夫との出会い、そして、仲のいい2人の少年の友情を描いた青春作品として読まれている。市野虎溪は「『少年行』を読めば、選者の鑑識の誤らぬことが分らう。実に傑作と謂つて可い」¹と評し、片上天弦は「この作家の処女作とも見る可き『少年行』が、今尚僕に遺している感じは、やはり家郷の感とでもいふ風なドメステイックな気持ちである」²と評した。吉田精一³や臼井吉見⁴の「解説」では、中村星湖のことを「自然主義諸作家のうしろにある一人」とみて、この作品を自然主義の名作と説明している。一方、青野季吉は「これは自然主義作品といふよりも、むしろロマンチックな作品と云ひたいほど、若々しい、がむしやらの、主観的な作品である」⁵と述べている。実際、作家自身も「新序」⁶で、「明治末期の、自然主義運動方に起こらんとする頃の、わが国文壇における浪漫派、写実派の諸作家の影響がすくなくな」と作品が持つ2つの性格を認めている。

一方、数少ない評のなかで、二葉亭四迷の「『少年行』に就いて」(『二葉亭四迷全集』5に収録)は、この作品の理解に大きな影響をもたらしている。二葉亭四迷は次のように述べている。

『少年行』は私は苦なしに一等だと思ひました。ところが其の前半と後半とは別手に出でたのではないかと思はれるほどの相異で、思はず後半に至って前半を繰り返してみたほどです。(中略)要するに前の田舎の小天地を寫すには神來の興があつたが、人間を寫すに至ってはいけない。注文が作者の頭に出て、それで、無理に書いてみようとして書いたらしく、見劣りがします。前半は十分に笹つているが、人間を取り扱ふに至って作者が負けて、負けるから私意を出して失敗し、普通の作品になつて感服しないのみならず、不自然が出る。前半だけで、筆をとめて、あとは二人が前ほどなかよくなつたといふ位でとめて置いたらよかつたろうと思ふ。後半は要するに蛇足に近い。

二葉亭四迷による「神來の興」がある前半と「蛇足にちかい」後半という2項対立的な把握は、今までのこの作品の読み方に影響を与えている。たとえば、藤沢全は、二葉亭四迷の後半否定論に反論し、後半こそこの作品にとって不可欠な部分と指摘し、「前半部に

1 市野虎溪「文芸時評(雑纂)」(『早稲田学報』, 1907.6.1.)

2 片上天弦「小説月評」『文章世界』, 1910 (中島国彦編『文芸時評大系明治篇』13ゆまに書房, 2005), pp.100-101.

3 吉田精一「解説」(『明治文学全集』72, 筑摩書房, 1969), p.396.

4 臼井吉見「解説」(『現代日本文学全集』84, 筑摩書房, 1957), p.413.

5 青野季吉「解説」日本近代文学研究会編(『現代日本小説大系』第15巻 河出書房, 1952), p.308.

6 加藤禎行「中村星湖『少年行』試論」(『国文学研究資料館紀要』第28号, 2002.2), p.175.

牧歌性を、後半部に自我性を雰囲気としてもち、2少年の成長の推移と運命の分岐を美しい友情で照らし出している⁷と論じている。また作品における語り手の位相を論じた加藤禎行は、いくつかのプロットの「時間的順序を前後させる叙述がある」と指摘しながら、「作品前半部の進行は穏やか」で、「回想体の作品記述である」が、後半部は「回想する語り手の介入はなく、むしろ語り手『自分』は、回想される『自分』に距離をほとんど置かない語り手に転位している⁸」と述べている。

以上のように先行研究では、「少年行」は2人が親友でいた小学生時代(第1章―第12章)という前半と、中学生になった2人が再会して、そして中学卒業後の武が精神病院に入院した牧夫を見舞う結末までの後半(第13章―第23章)からなっているという見解を定説のように示している。

しかし、ここで考えたいのは、そもそも、「少年行」はそのような前半と後半に分けて描かれた物語なのであるか、ということである。青野季吉の「解説」⁹で言及した「明らかに象徴的なものを含んでいるといわなければならない」というのは、武が牧夫のことを「いい友達」から「性の合わない人」と思うように変わった部分だけなのだろうか。そして、藤沢が主張した「美しい友情」というものは果たしてほんとうにあったのだろうか。吉田司雄が指摘した「出会いから別れまで少年の成長を辿った作品」¹⁰の深層に、もうひとつの物語も語られているのだろうか。本稿では、それらの回答を求めながら、先行研究で用いられた中村星湖の生い立ちや語り手からのアプローチではなく、つまり「自分＝大人になった武」の回想譚としてではなく、牧夫をめぐるもうひとつの物語として考察してみたい。副人物と思われる「宮川牧夫」が出現ごとに、「牧夫さん」、「宮川」、「牧夫君」という呼称が変化することに焦点をあてて、子供から立派な大人になるというあたりまえのような成長の過程を「逆行」している少年の姿について考察を進めていくものとする。

なお、本稿での本文引用は島村抱月ほか編の『代表的名作集 第三十編 中村星湖 少年行』(新潮社、1918年7月)によるものである。

2 多様な牧夫が存在するテキスト

「少年行」冒頭部は次のように書かれている。

熔岩の崩れの富士の裾は、実に広漠たる眺めである。駿河おもての所謂御厨在を
旅する人は、黒褐色の焼砂の道や、雪しろ川のから床の外は、たゞ一面の茅野で、

7 藤沢全「中村星湖『少年行』」(『国文学：解釈と教材の研究』第39号、1994.6)、p.123.

8 注6に同じ。

9 注5に同じ。

10 吉田司雄「作家中村星湖の出發——変形<立志編>としての「少年行」——」(『国文学研究』第81号、1983.10)、p.162.

偶に灌木の林がチヨボチヨボと、くすねて生えてるを見るばかりであらう。雨の日などに独りで通る時は、淋しい、見棄てられたやうな、曠野の感じが犇々と迫つて来る。けれども、表だけに、南だけに、常には明るい、開いた、大まかな、ゆとりのある心地を与へる。さて試みに須走から、春初ならば雪解の水の河をなす細長い名無し谷を渡つて、登り一里の籠坂峠を越して見給へ。誰も知つてるとほり峠から北は甲州路で、天地は全然一変する。脉々たる連山は富士に迫つて裾野を取巻いて、黒木林や落葉林の間に、山中、明見、河口、西、精進、本栖の湖水が散在して——とはいいい其等が此峠から悉く見える訳ではない——其の白く輝く水と黒く集まる山々との対照が、妙に暗い、深い、閉ぢこめられたやうな感じを惹起こす。(第1章)

「少年行」が書かれた1907年前後は、ちょうど夏目漱石の「吾輩は猫である」(1905年1月)、島崎藤村の「破戒」(1906年3月)、田山花袋の「蒲団」(1907年9月)等が次々発表され、いわゆる自然主義文学最盛期を迎える時期であるが、「少年行」はその真只中に生まれた作品である。二葉亭四迷や島村抱月の絶賛をうけた通り、「少年行」は、冒頭のように自然主義文学手法によって富士山麓の自然、風土や人物が極めてリアルに描かれ、透徹した写生のようである。吉田司雄は、この冒頭について「作品の基調である<明>と<暗>のイメージ」¹¹が対置されていると捉えている。吉田の指摘に概ね賛同できるものの、引用文の「天地は全然一変する」という文からは、その後の展開は「明」より、むしろ「妙に暗い、深い、閉ぢこめられたやうな感じを惹起こす」ように、「暗」のほうが本当のテーマであることがうかがわれる。そして「少年行」で対置されているのは自然風景だけでなく、奈良原武と宮川牧夫の2少年も、それぞれ<明>と<暗>で象徴されているといえる。星湖自身が「新序」で述べた「一人の幼馴染の友達と自分との関係及びその友達の薄幸な生涯」という言葉からみても、父親と同じように気が狂ってしまい、若くして亡くなった牧夫のほうが、明らかに「薄幸」の<暗>である。一方、かつての「柴拾いの田舎もの」から、都会の中学校の組長にまで出世できた武のほうは、謳うべき「立志編」のモデルとして<明>になる。結果からいえば、2人の境遇はともに「全然一変」したのであるが、武と牧夫の成長方向は真逆ともいえる。「暗」のテーマとして読めば、出世の成功例ともいえる武よりは、世間でいう敗者、つまり成長の道で逆行した牧夫のほうがより中心的な役割を担っているともいえよう。

冒頭の描写について、加藤禎行が指摘しているように、「この甲府の風景記述や地理的な事項説明が、十歳の少年の認識ではないことから明瞭なのだ」¹²。この指摘からは、語り手(大人になった武)が子供の頃を回想するという構成がわかる。すなわち、回想する語り手(大人になった武)からみた牧夫と、回想された子供の武からみた牧夫の両方が存在している。さらに、回想された子供の武にとっては、小学校時代の武の「崇拜の本尊」であった牧夫、牧夫だけ中学校に行ったために武がわざと隠れて会わなかった

¹¹ 注10に同じ、p.166。

¹² 注5に同じ。

牧夫、それから中学時代の武が「性の合わない」と思った牧夫も存在している。要するに、テキストの中にさまざまな「牧夫像」が混在しているのである。言い換えると、武による牧夫の「呼称」、つまり変化しつづける武によって定義される牧夫の姿も、常に変わっている。田舎から大都市に移り、エリートコースに乗った武と、大都市の出身にもかかわらず、精神病院で惨めな最期を送らざるをえなかった牧夫を比べてみれば、武の変化は世間でいう進歩と呼べるものである一方、牧夫の変化はその逆である。しかし、いわゆる失敗例である牧夫という人物の意味は決して「薄幸のもの」には止まっていな。牧夫の「呼称」を「少年行」を解説するに重要な手掛かりにすれば、今までの読みを一変することになるだろう。なぜなら、近代化とともに進歩する時代の流れと同調して進歩している武とは異なりながら、成長の道を逆行する少年も確実に意味をもつものに違いないからである。

「少年行」で牧夫の登場シーンは下記のようなのである。

「皆石筆を置いて……」例の静かながらも号令口調、——実は生徒は先刻から氣を取られて、一人として石筆を動かしてはる者はない——「え、今日は皆様のお仲間が一人増えました、それは茲にお出での宮川牧夫さんと云つて、校長先生の甥御に当る——校長先生のお姉様のお子様です。これ迄谷村の町の小学校においでたさうですが、御家内に御不……え、その御都合で、今度此学校の此級へ皆様の仲間入をなさる事となりました、それで今度は皆様と一緒に同じ村に住み、同じお稽古をし、同じ遊びもしますので、兄弟のやうに……兄弟よりももつと親しく、交情よくして貰はねばなりません。さア何うです、斯う云ふ好い兄弟を儲けたばかりでなく、交情よくして貰ふお褒美に、奥様からこんな」と包を持ち挙げ、「下さり物があります、三時のお退出の時には配けてあげるから、皆大人しく待つて居なくてはなりません。」と云ひ終つて壇を下つた。(第3章)

牧夫は武がいる小学校の担任である山田先生の紹介で、はじめて作品に登場した。先生の紹介からは、東京からの転校生(=外来者)、校長先生の親戚(=裕福層)、家庭の不幸(=親なし)という牧夫の異質性がわかることになる。作中で、「宮川牧夫」というフルネームが登場した場面は4か所ある。「宮川牧夫」の2回目の登場は東京に戻った牧夫が武への手紙に書いた差出人(第13章)、3回目は同じ中学校で再会した武が絵画部第一等作品の筆者を「回想」した時、「筆者は即ち宮川牧夫!」という1文(第19章)、そして最後は警察が発狂した牧夫を保護して、電話で牧夫の身分を確認したとき(第23章)である。このように「宮川牧夫」が出てきた4か所は、作品の中ではまさに、武から見た牧夫像の変化の節目ともいえるところである。これらを踏まえると、定番のような「前半と後半」のような読み方とは異なる、「『少年』を主題化したうた」¹³と思われた「少年行」を解説していく別の可能性が十分考えられる。つまり、「宮川牧夫」を節目にすれば、「少年行」を、転

¹³ 注7に同じ、p.122.

校生としての牧夫(第3章)→絵がうまいが算数が下手な牧夫(第6章)→田舎の小学校から都会の中学生になった牧夫(第13章)→絵で1等賞を受賞した牧夫(第16章)→発狂した牧夫(第18章)という、牧夫像の変化に沿った読み方が可能となる。

3 仰視された「牧夫さん」の模範性

同じ宮川牧夫という人物にもかかわらず、武からは「牧夫さん」、「宮川」、「牧夫君」というように、登場するたびに異なった「呼称」で呼ばれている。その呼称の変化にしたがい、牧夫像も大きく変化している。おおまかに分類すれば、小学生の武が「崇拜の本尊」と思った大都市からの転校生である「牧夫さん」；「打ち解けてくれない、誰ともかわらない」、武の幻想に出てきた「牧夫君」；それから、中学校になった武が気の毒だとのみ思った「宮川」ということである。しかも、これら「3様」の牧夫はそれぞれ孤立して現れたのではなく、テキストの中で混在しているのである。

「牧夫さん」と呼ばれた牧夫は作品の第3章ではじめて登場した。牧夫が転入してきたばかりのころ、「房くん」との雪合戦で負けて笑われるのがいやなため、野獣のように突進した「自分(子供の武)」の姿が次のように描かれている。

新来の牧夫さんは縁側に立つて見て居た。折々振り返ると、一々自分の働き振りを見て居るやうな気がした。雪の丸が縦横に飛び違ふなかで、頭は次第に熱して来た。ふと敗けては牧夫さんが嗤ふであらうと思ふと、堪へぢのない自分は野獣のやうに突進したのであつた。

紫の包を前にして、あの中物が食べたいと思つて唾を呑んだは暫時、半時間前の出来事を考へると悔恨の念が起こる——自分は余り軽率であつたか、房公に食附いたのは気の毒とも思はんが、始終を見て居た牧夫さんは、あの柔順しなやか牧夫さんは嘸さげすむ事であらう。(第3章)

このころの武は「牧夫さんは別段に好きなやうな気がする。何故だらう?何故だか知らないが矢鱈に好きだ(第4章)」、「牧夫さんでは、知らないかい、僕の友達さ(第5章)」、「だって今度も牧夫さんが一番だちゆうがすものを(第6章)」。

つまり、牧夫と知り合った最初のころに限り、牧夫が武の憧れの存在であるため、地の文でも、牧夫に対しても、他人に対して武が話した会話文でも、牧夫のことは「牧夫さん」と呼ばれている。この段階において、回想する大人になった武にとっても、回想された小学生の武にとっても、牧夫は「さん」づけで呼ぶべき存在である。小学生の武の、牧夫に関する第1印象については、こう描かれている。

輪廓の好い顔の、色は青い程白く、鼻筋の通つた、目の割合に大きい、きつとむすんだ唇の賢こげな、そして服装の整然とした様子は、まさしく此辺の百姓の子で

はない。(第3章)

「学問が出来る。行儀がよい。色も白い、衣服もさつぱりして居る」転校生の牧夫はそれまで田舎に閉じ込められていた小学生の武にとって新世界への扉のような存在である。しかし、子どもの武がわかったかどうかを別として、ほんとうに武を惹きつけたのは「友達」になってほしい牧夫のこと以上に、牧夫とともに小学生の武の前に現れた、今まで見たこともない新世界そのものである。

その後、東京に帰った牧夫が中学に入学し、修学旅行で田舎に帰った時、「目が涼しく、青く、透徹るやうな五分刈頭、それに学校服への肩章——聞けば組長の章ださうな——白いカラーも似合はしく、金ボタンの数多いジャケットの尽端に、露西亜鞞の胴締をしてゐた」立派な牧夫を見た武はもう「『牧夫さんに逢ひたい。』よりは、『中学校へ行きたい。』が勝つて居た」という考えを持つようになった。

その場面で描かれた牧夫が着ている学生服は、文明開化と呼ばれる1連の西洋化の動きの中で普及してきた制服のことであると考えられる。それが軍人の制服をモデルとしたものである背景¹⁴を見逃してはいけない。そうした姿の学生を見ると、自然に富国強兵の担い手の未来図が頭に浮かぶことになるだろう。しかし、それ以後、武が崇拜していた「牧夫さん」はテキストの中から消えてしまうことになる。「牧夫さん」の消失には小学生の武にとって牧夫は「友達」というよりは、武のなりたい姿、言い換えると出世の「理想像」である真実が潜んでいる。中学生の制服姿の牧夫をみた武は、模範だった「牧夫さん」のかわりに、「中学に行きたい」という新しい目標が立てられたため、「牧夫さん」の存在が必要でなくなってしまったのである。それにより、それ以後のテキストでは、小学生の武に尊敬されていた「牧夫さん」は、しだいに中学生になった武に見下された「宮川」の方向にむかって変わっていくことになる。

4 幻視の中の「牧夫君」の虚無性

小学生の武が仰ぐ「牧夫さん」と中学生の武が見下す「宮川」の間には、「牧夫君」という呼称も存在している。3つの呼称で登場頻度が一番少ないのは「牧夫君」である。牧夫が「打ち解けてくれない(第4章)」時、小学生の武が牧夫を「妄想」した場面(第4章)、そして武が牧夫君の口真似をした時(第5章)や牧夫が武に絵本を貸してくれた時(第5章)などを含め、延べ15か所ある。しかも、そのほとんどが第4章、第5章と第6章に集まっている。それぞれは、仲間になじまない牧夫、小学生の武の幻視にでた牧夫、武が言い方を真似した牧夫、武に絵本を貸した牧夫のことである。例えば、武の幻視の中に登場した

¹⁴ 1882年(明治15)文部省の指導で官立学校に学生服が普及、1884年(明治17)に東京農林学校、1886年(明治19)に東京帝国大学が詰襟金釦を採用した以後、中等教育以上学校で制服として着用するようになった。ウェブマガジンhttp://openit-magazine.com/answer/f_answer/660/を参照。

「牧夫君」について次のように描かれている。

チラリと見えて直ぐ消えた……ありや何としても牧夫君の顔……目もなく、鼻もなく、たゞ朦朧と白かつた。それでも……あれへ嵌まるものは牧夫君の目や鼻よりない。だが沈んで居ない時の牧夫君は、と考へてみると懐しい感じが犇々と胸へ迫る。(第4章)

ここでは、「牧夫君」の「朦朧」という特徴が際立っている。「牧夫君」は仰視された「牧夫さん」や俯瞰された「宮川」と比べれば、小学生の武にとって、一番距離が近い牧夫であり、唯一、小学生の武にとって、対等の立場にいる、友達としての牧夫であるといえよう。しかし、そうした「牧夫君」は幻視の中にしか存在できない。次に登場した「牧夫君」は、単なる武と対等な立場にいる「牧夫君」ではなく、「宮川が―牧夫君が」という表現で次のように登場した。

皆一様に海軍帽、巻いて肩にした外套の緋羅紗や黒縹子の裏を見せ、金ボタンを光らせて整然と列を作つた凛々しい扮装を、遙かに見かけた時、其一行に宮川が―牧夫君 が居ると気附いた時、ゾキリと電気に撃たれたやうな心地がして、自分はずつと物蔭へ隠れた。そして、「此醜態で！」と己が姿を見返つた。浅ましくも汚れ切つた山着物…ふと涙が落ちる。泥の着いた拳を挙げて眼を抑へたが、遂に其処へ泣き倒れた。(第13章)

村を去ってから立派な中学生になった牧夫を久しぶりに見た時、小学校を卒業したが、中学校に行っていない武の中で「宮川―牧夫君」という牧夫が存在していた。この複合式の呼称には、中学生になって武と世界が違うようになった牧夫と、武の友だった牧夫という2様の牧夫を描いた表層と、武自身の重層的心象を表した深層がある。立派な中学生になった牧夫を見たとき、武は、先に距離感のある、他人のような「宮川」として認識している。それは、久しくあっていないためでもある。まだ田舎にいる「自分」と次元が違う牧夫のことを他人としてしか見られないためでもある。そのあと、親友だった「牧夫君」のことを思い出し、さらに「醜態」に苦しむ武は会いたかった牧夫に結局会わず、隠れることを選んだのである。ここにある「宮川」と繋がって出てきた「牧夫君」からは、中学校にいない武が自分より先に立派な中学生になった牧夫に対して抱く嫉妬やコンプレックスが読みとれるであろう。

「牧夫君」の最後の登場は第18章で、中学3年生になった武が宮川の家に行くとき、宮川の母に向かって聞いた「牧夫君は御在宅でせうか?」という1文である。その時、「犇猛な名を得た」武は、心身とも衰弱になった「宮川」とすでに「優劣」位置が顛倒し、牧夫の家を訪れ、牧夫と会っても、「宮川」のことを「自棄気味の友を、気の毒に思つたのみ」である。この時期において、地の文であろうと、人との会話文であろうと、牧夫のこと

を「宮川」としか呼んでいない武が、牧夫の母とのこの会話に限って、作為的な意図が読み取れる。「牧夫君」と呼んでいることに作為的な意図が読み取れる。牧夫の母の前で、「牧夫君」をもって、牧夫への親しさをアピールする行動には、その時すでに牧夫に勝っていて、上位者からの視線の武の偽善や自己満足、そして世故に長けているという出世できたものならではの一面が見られるのであろう。

5 俯瞰された「宮川」の弱小性

「宮川」という呼称が最初に登場したのは第6章の地の文である。

加之また宮川は手工が上手、画が上手で、町から持つて来た水彩顔料で、鳥獸を描いたり、景色を写したり、雑誌の挿絵を色取つたりした。

(中略)

真似をしても、これだけはどうも出来ぬ。あゝ何としても宮川はえらい者！かくていよいよ彼は幼い自分の崇拜の本尊となつた。

(中略)

矢張り宮川は静かな所が好きであつた。(第6章)

第6章からの地の文では、牧夫にかんしてほとんど「宮川」で述べられている。そこから、回想主体である大人の武のなかでは、牧夫のことを宮川と認識していることがわかる。しかし、同じ段落の会話文の中では、つまり小学生の武にとって、まだ「牧夫さん」と呼んでいる段階である。大人の武と小学生の武は、この6章を分岐点にして、冒頭に書かれたように「天地一変」したがごとく、牧夫に対する認識が明らかに違うようになってきたのである。

地の文で回想する大人の武に語られた牧夫は、「絵が上手」という「えらい宮川」を除けば、絵具が捨てられ、「筒袖で眼を拭つて」泣いていた宮川(第6章)、武の家で焼蜀黍を食べたあと、下痢で憔悴れて「黙つてホロホロと涙を溢した」宮川(第7章)、「算数の時間に痛めつけられるのは甚しい」宮川(第9章)、「首倒れた」宮川(第16章)、「恐い目をする」宮川(第18章)、「学校を休んだ」宮川(第19章)など、みな弱くて、「実に気の毒」で、武に負けている牧夫である。つまり、大人になった武から見れば、牧夫の取り柄は絵しかない。しかも、その「絵が上手」というのは、対等の友達である小学生の武からではなく、回想する主体である大人の武が評価する立場で、上からの目線で言っていることである。一見褒め言葉のように見えるだろうが、「宮川」の絵が上手だと語っている時、ほんとうは大人になった武が優位に立っていることを表しているのである。

小学生の武による「宮川」は第8章の武の「考え」ではじめて登場したのである。

「だが宮川はなぜあゝ脾弱いづら、町場の者は皆あゝかしら？」斯様な考へをめぐらしながら、日に輝く真夏の潮添ひに、凸凹のはげしい石ころ道を上つたり下つたりした。(第8章)

このころの武は、口では、牧夫をまだ「牧夫さん」と呼んでいるが、心の中ではすでに「宮川」は弱いという判断がついたのである。

そして回想された武にとって、「牧夫さん」が完全に「宮川」になる前に、一か所だけ、「宮川」と「牧夫さん」が併存したところがある。それは牧夫が村から去り、都会に戻ることを知った小学生の武の考えについて描かれているところである。

「でも宮川だけは残つてるかしら、先生は行つても惜しくない、牧夫さんだけ居ればよい。」と思ひながら、船から上つて家へ着く迄、小さい胸を痛め／＼歩いた。(第11章)

ここでは、小学生の武の考えの中で、弱い「宮川」と模範としての「牧夫さん」が併存している。それは、このころの武にとって、模範としての「牧夫さん」を必要とする出世欲と、「牧夫さん」にさらに越される強い不安、それから「宮川」を自分の下に居させようとすることで、自分を保つ必死さがあるからではなからうか。しかし、まもなくして、武が県立中学校の生徒(第16章)になってから、地の文でも、会話文でも、かつての「牧夫さん」は2度と現れず、「宮川」しかいなくなったのである。その時点からは、回想された子供の武と回想する大人の武による牧夫の位置づけが一致するようになり、憧れの対象としての「牧夫さん」がなくなり、弱い「宮川」としか認識しないことになってしまうのである。そうすると、かつて大好きだった「牧夫さん」が「性の合わぬ」「宮川」になったのも不思議ではなくなるのである。宮川が武の「性の合わない人」に変わったことについて、本文では次のように描かれている。

自分が金手町の穀倉の二階を去つて城北新紺屋町の大工の家の一室を借りて、自炊を始めたのも此頃で、三年の級長として「瘴猛」の名を得たのも此頃からである。

それで宮川との交りも、普通の学友と同じに逢へば挨拶するだけの事で、一月逢はなくても二月逢はなくても態々下宿を訪ねるやうな事はなく、偶さか話為ても可厭に取済ました陰気臭い「性の合はぬ人」と思ふやうになつて了つた。(第17章)

青野季吉はこの部分をこう解説している¹⁵。

中学時代の奈良原武が3年の級長として『瘴猛』の名を得、宮川牧夫との友情にやや溝ができて、たまに曾つても宮川を『性の合わぬ人』と思ふやうになることがある。この個所などは、明らかに象徴的なものを含んでいるといわなければならない。

¹⁵ 注5に同じ, p.308.

しかし、青野の解説とは違い、呼称の変化からみれば、武が牧夫との友情に溝ができたのは、武が「獯猛」の名を得てからではないことがわかる。ほんとうは、武の考えの中で「宮川」が「牧夫さん」の代わりに現れた時点から、そのいわゆる友情にすでに溝が出てきている。そもそも、武の牧夫に対する「友情」は本当の友情なのだろうか。むしろ、見た目だけの「友情」、または勘違いの「友情」と言えよう。その裏には、武の出世欲望こそが潜んでいる。牧夫と友情があるかどうか、性が合うかどうかとは関係なく、牧夫との邂逅は武の出世欲が目覚めたきっかけであり、言い換えれば、牧夫は武が自分を振起して、ますます偉くなろうとするため利用された「道具」ともいえよう。

算術がだめで、涙を流した牧夫や、「自分」から焼蜀黍をもらって食べた下痢でおれた牧夫など、つまり「脾弱い」牧夫について、すべて「宮川」で描かれている。とくに算術が苦手という牧夫の設定そのものは、数学のような近代的科目が、エリート養成が目的とされた富国強兵の国策のもとで重視された明治時代¹⁶において、時代の流れについていけない弱いイメージである。算数が大の苦手な「宮川」は、小学生の段階から、とくに「エリート」のコースから外れていたことになる。それに、当時絵画が幼児から低学年までだけの教育科目であることから、絵画のみ上手である「宮川」に、まったく成長できる余地が設けられていない運命も暗示されている。そうした弱い「宮川」に対して、田舎者のままで悔しくていられない小学生の武、「獯猛」になった中学生の武、そして勝者として哀れな友の回想を語る大人の武は、当然のように、牧夫のことを「宮川」として俯瞰しているわけである。しかし、最後の最後まで、絵が好きで、描きつづけていた弱い「宮川」だからこそ、武をはじめとしたその時代の多数派とは違い、出世コースに乗らず、時代に逆行することを選んだのであるといえよう。

6 おわりに

以上、テキストにおける「牧夫さん」、「牧夫君」と「宮川」について述べてきたが、それぞれの牧夫の様相を下記のとおりまとめてみよう。小学生の武の中で、単純に親しくなりたい、対等の友達として存在しているのは「牧夫君」で、世間の基準で見られている優等生のイメージは「牧夫さん」、それから偉くなった武に俯瞰されたのは「宮川」である。大人の武は回想のなかで、小学生の武より出身などの点で優れた牧夫を天才のように仕立て上げたが、牧夫との優劣関係を逆転させようと決めた時点から牧夫を哀れに思う余裕ができていたのである。そうした武は明治時代における立身出世のモデルともい

16 「少年行」が書かれた7年前、1900年(明治33)の小学校令改正より、尋常小学校義務教育4年無償制度が成立し、新たに制定された小学校令施行規則によって、小学校教育が統一整備されることになった。そして、日本で最初の国定教科書『尋常小学算術書』と『高等小学算術書』は1904年から使用されたが、明治時代の数学教育政策は、エリート養成が目的とされ、富国強兵の国策のもとでの数学教育政策である。今井敏博「日本の数学教育政策に関する批判的考察」(同志社政策科学研究 第19巻 第1号, 2017.10), pp.359-370.参照。

えよう。武という田舎の少年が貧困などの困難を乗り越え、最後に大都市で活躍できたという単純な成長物語、努力や根性、そして大人になってもかつての友達を忘れない「やさしさ」といった教化性がテキストの表層に出ている。順調に出世できた武の側からみれば、まさに明治時代が推奨した成功要素が揃っている。回想された子供の武と回想する大人の武の、牧夫に対する呼称の変化の中に、その時代の大人たちが子供たちに求め、その時代のイデオロギーにも入り込んでいる富国強兵などのための「児童像」や「未来像」が垣間見られる。

一方、大都市出身にもかかわらず、まったく出世できなかった牧夫は、どうだろう。絵だけが上手な牧夫は狂死してしまったという結果からみれば、時代にとって不適当なもの、不必要なものとして排除され、言い換えれば、滅びるものになってしまったのである。そうした牧夫は、国家レベルでいえば、大人たちに期待され、富国強兵の責任を背負っている未来の大人として、不合格者であろう。しかし、この小説で実に感銘を与え、心を捉える力を持っているのは、成功例としての武ではなく、むしろハッピーエンドでない牧夫のほうだと考えられる。牧夫が命をもってそういう大人たちの期待を裏切ったからである。武は世間では、田舎者から立派な成功者に「変身」した。そして牧夫もまた武のなかで、だんだん「牧夫さん」から「宮川」に「変身」してしまったのである。しかし、武とは違って、人の期待や評価を問わず、自分の理想(絵を描くこと)で生きようとする牧夫は、発狂者と扱われ、若くして亡くなってしまった。そうした意味からいえば、「少年行」は美しい友情を描いた成長物語どころか、少年が大人になる残酷さと切なさを語っているものであるといえよう。「少年行」は、時代の流れに応じながら大人になる武のパターンと、時代に逆行する牧夫のパターンという成長の道への再確認を喚起しているものである。牧夫の呼称の変化は、児童像の歴史の変遷という意味では、ずいぶんスケールの小さい話に止まらざるを得ないが、真の少年ならではの時代に逆行する勇気や裏切りの精神を秘めた近代日本児童像の一欠片からは、輝きと尊さを感じられるのではなかろうか。

参考文献

- 青野季吉(1952)「解説」『現代日本小説大系』15, 東京: 河出書房, p.308. Aono, Suekichi(1952) *Kaisetu Gendai Nihon Syosetu Taikei* 15, Tokyo: Kawadeshobo, 308.
- 藤沢全(1994)「中村星湖『少年行』」『国文学: 解釈と教材の研究』第39号, pp.121-123. Fujisawa, Matsui(1994) Nakamura Seiko Shonenko, *Kokubungaku Kaisyakuto Kyouzaino Kenkyu*, no.39, 121-123.
- 二葉亭四迷(1965)『少年行』に就いて『二葉亭四迷全集』5, 東京, 岩波書店, pp.210-214. Futabatei, Shimei(1965) Shonenko ni Tuite, *Futabateishimei Zensyu*, Tokyo: Iwanamisyoten, 210-214.
- 市野虎溪(1907)「文芸時評(雑纂)」『早稲田学報』,1907.6.1. Ichino, Kokei(1907) *Bungei jihyo(zassan)*, *Waseda gakuho*, 1907.6.1.
- 今井敏博(2017)「日本の数学教育政策に関する批判的考察」(『同志社政策科学研究』第19巻第1号), pp.359-370. Imai, Toshihiro(2017) *Nihon no Sugaku Kyoiku Seisaku ni Kansuru Hihanteki Kosatu*, *Doshisha Seisaku Kagaku Kenkyu* Vol.19(1), 359-370.
- 加藤禎行(2002)「中村星湖『少年行』試論」(『国文学研究資料館紀要』第28号), pp.165-190. Kato, Yosiyuki(2002) Nakamura Seiko Shonenko Siron, *Kokubungaku Kenkyu Shiryokan Kiyo* Vol.28, 165-190.
- 中村星湖(1918)『代表的名作集第三十編中村星湖少年行』, 島村抱月ほか編, 東京: 新潮社. Nakamura, Seiko(1918) *Daihyouteki Meisakusyu Daijyusanhen Nakamura Seiko Shonenko*, ed. Shimamura, Hogetu etc, Tokyo: Shinchosha.
- 片上天弦(1910)「小説月評」『文章世界』(中島国彦編(2005)『文芸時評大系明治篇』13, 東京: ゆまに書房, pp.100-102. Shosetu Geppo, *Bunshosekai Nakajima*, Kunihiko ed.(2005) *Bungeijihyotaikei Meijihen* 13, Tokyo: Yumanishobo, 100-102.
- 臼井吉見(1957)「解説」『現代日本文学全集84』, 東京: 筑摩書房, p.413. Usui, Yosimi(1957) *Kaisetu, Gendai Nihon Bungaku Zensyu* 84, Tokyo: Chikumashobo, 413.
- 吉田精一(1969)「解題」『明治文学全集72』, 東京: 筑摩書房, pp.396. Yoshino, Seichi(1969) *Kaisetu, Meiji Bungaku Zensyu* 72, Tokyo: Chikumashobo, 396.
- 吉田司雄(1983)「作家中村星湖の出発—変形<立志編>としての『少年行』—」『国文学研究』第81号, pp.161-172. Yoshida, Morio(1983) *Sakka Nakamura Keiko no Syuppatu: Henkei Rissihentositeno Shonenko*, *Kokubungaku Kenkyu* Vol.81, 161-172.
- オープンット 2017年5月10日. 忘れられた今昔物語, オープンット.2017年12月9日閲覧. OPEN IT!! (2017.5.10) Wasurerareta Konjikimonogatari, OPEN IT!! , 2017.12.9.(http://openit-magazine.com/answer/f_answer/660/)

朱田云 Tianyun ZHU

(中国) 復旦大学日本語学科博士課程。日本近代文学。翻訳書に『春与阿修罗(『春と修羅』)(北京: 中国人民出版社, 2017)、『驛路(駅路)』(北京: 中国人民出版社, 2017)、『第十年的情人节(素敵な日本人)』(北京: 中国人民出版社, 2017)など。